

オモロの構造

玉城, 政美 / タマキ, マサミ

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

61

(終了ページ / End Page)

124

(発行年 / Year)

1976-07-28

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015510>

オモロの構造

玉城 政美

オモロの注釈研究は、明治の田島利三郎の遺産を継承した伊波普猷『おもろさうし選釈』にはじまり、仲原善忠『おもろ新釈』、仲原善忠・外間守善『おもろさうし辞典・総索引』、外間守善・西郷信綱『おもろさうし』（日本思想大系18）と継続されてきている。「一種不可解な韻文」（チェンバレン）といわれたオモロも、現在では多少の未詳語を残しながらも、ほぼ全体に語釈がつけられるようになった。ゆるやかな歩みながら当初からは想像もつかぬ進展を示したといえよう。今後この方面の研究の成果を承けて、個人によって異なる語釈の幅をちぢめる努力をつづけなければならないだろう。一首一首のオモロを理解する上で、語釈が精密であればあるほど全体に対する理解が深まることはたしかだから……。しかしながら、従来の注釈研究の成果をふまえても、一首の解釈に際してどうしても突きあたる壁がオモロにはある。そしてそれは、おそらくオモロの構造的特質によるもののように、語釈の精密度とは次元が異なることからのようである。たとえば、

一聞得大君ぎや

降れて 遊びよわれば

天が下

平らげて ちよわれ

又鳴響む精高子が

又首里杜ぐすく

又真玉杜ぐすく(二一七)

このばあい、「降れて 遊びよわれば」の主語は聞得大君と解釈されているし、そう解釈してまちがいなからう。すなわち、「聞得大君が天降りして神遊びをし給うからには、(国王様は)天下を平定しておわしませ」と通釈される。ところが、これと全体の形が類似するオモロ、

一聞得大君ぎや

十嶽 勝りよわちへ

見れども飽かぬ首里親国

又鳴響む精高子が

又首里杜ぐすく

又真玉杜ぐすく(二一七)

このばあい、「聞得大君ぎや」と「十嶽 勝りよわちへ 見れども飽かぬ首里親国」との間には意味的

断絶があり、聞得大君を十嶽以下の主語と考えることはできない。同一節内にありながら意味的には断絶している。両者はどのように関連づけて解釈すべきか、また、なぜこのような現象が存在するのだろうか。この点の解明なしには語積がいかに進んでも一首の解釈にはゆきつかない。だからといって、もとより語積を軽視するわけではなく、次元の異なる問題なのである。例にあげた一―七をみると、「聞得大君ぎや」と「鳴響む精高子が」、「首里杜ぐすく」と「真玉杜ぐすく」のように対を構成する部分とそうでない他の部分とから成り、意味的断絶も両者の間で生じていることに気づく。オモロのわかりにくさは、おそらくこの構造に起因するだろう。本稿ではそのような見とおしに立ってオモロの構造を明らかにし、それをふまえて対句部と他の部分の意味的關係、さらには一首の意味を明らかにする前提としたい。

『おもろさうし』の記載法

外間守善氏は、オモロの歌形をクエーナ形式、オモロ形式、両者の複合形式とその変形に三分類し、それぞれ実例をあげてその特徴を述べている（「おもろ概説」日本思想大系18）。

まず、クエーナ形式に属する例として、

一かつれんまみにやこは やでおちへ

又中ひやくなこみなこは やでおちへ

又ひるなれば きも かよい かよて

又よるなれば いめ かよい かよて
又にしみちの ぢやなみちる いきやしゆ
又ひがみちの やぎみちる いきやしよ
又ひが道い やぎのおもいぎや まちより
又にし道や ぢやなおもいぎや まちより
又いぢや やけな中みぢぢよ いきやしよ

(卷十四、九九六)

一 又 け あがる三日月や

(又) 又 け かみぎやかなまゆみ
又 又 け あがるあかぼしや
又 又 け かみぎやかなまゝぎ
又 又 け あがるぼれぼしや
又 又 け かみがさしくせ
又 又 け あがるのちくもは
又 又 け かみがまなきゝおび

(卷十、五三四)

等をあげ、この歌形の特徴について、「クエーナ形式というのは、対語、対句をくり返しながらことから確かめつつ、しだいに全体のことからを進めていくという特徴を持っている」と述べ、つづけて「これは南島の呪詞・呪言を含めた神歌が普遍的に共有している歌形であり、それらからの流れこみをクエーナという古謡が受けついでいることを思うと、古い歌形であると思われる。しかもそれは、文字を持たない社会の人達の常套的に持っている歌形であるともいわれていることである」と、この歌形が古いことを指摘している。

つぎに、オモロ形式に属する例として、

一まにしが まねまね ふけば

あんじおそいでだの

おうねど まちよる

又おゑちへが おゑちへど ふけば

(卷十三、八九二)

一たいらまさりきよが

あかはんた のぼて

おほたばる みやれば

しらちやねの

よりなびく きよらや

又とよむまさりきよが

(卷十六、一一六七)

等をあげ、この歌形の特徴について、「クエーナ形式との明らかな違いは、①対語、対句を使わないでこ
とがらが進められていること、②歌形が短かく構造化していること、③構造化されたことがらもういち
ど反復されることの三点にある。

①と②はクエーナ的世界(呪術的世界)を脱け出そうとするまったく新しい歌形の成立であるが、③は、
対語、対句をくり返しつつつことがらを進めてきたクエーナの心意の残滓であると思われる。③にみられる
反復が完全にふっきれたとき、すなわち、反復をもってする呪的確かめの心意から解放されたとき、おも
ろは新しいウタ(琉歌)の世界へ流れこんでいく」とクエーナ形式と対比しながら発展段階的關係、オモロ
形式の新しいことを述べている。

つぎに、複合形式に属する例として、

一きこゑ大ぎみぎや

おれて あすびよわれば

てにがした

たいらげて ちよわれ

又とよむせだかこが

又しよりもりぐすく

又まだまもりぐすく(巻一、一)

一きこへきみがなしがよ

やちよくた まちよ ふさの

よりあふしま はちへおわちへ

又とよむきみがなしがよ

又あさどれが しよれば

又ようどれが しよれば

又いたきよらは おしうけて

又たなきよらは おしうけて

(巻十三、九六〇)

等をあげ、「この二例も、前部がオモロ形式、後部がクエーナ形式になっている。『おもろさうし』全体では、この複合形式とその変形と認められるものが多数を占めている。

『又』は折り返しの記号で、クエーナ形式とオモロ形式の場合は、折り返しがかなりはっきりしている。しかし、複合形式とその変形になると、折り返す方法の不明な点が多く、それらは今後の研究にまたなければならぬ」と、この歌形の歌唱法の不明なことを指摘している。

複合形式の歌唱法が不明なことは、オモロ研究にとって大きな障害になっている。これは単に歌唱法だけの問題にとどまらず、構造論や一首の意味の解釈にかかわる根深い問題だからである。以下複合形式も含めて、オモロの歌唱法（＝歌詞の形態）について考えてみたいが、その前に順序として『おもろさうし』の記載法について実態に即しながら明らかにしてみたい。

『おもろさうし』の記載法は、同一歌詞が反復されるとき、第一節にその歌詞を記載し、第二節以下では省略する傾向がみられる。具体的にみていくと、

一きこゑ、せのきみきや

うらくと、はりやせ

又とよむ せのきみきや

（巻九―五〇九）

このオモロは、第二節「とよむ、せのきみきや」につづけて、第一節の二行め「うらくと、はりやせ」が繰り返されるのだが、ここでは記載を省略したのである。すでに第一節に記載してあるので、第二節ではその労を省いて前節と異なる部分（対句部）だけを記載する形をとっている。「記載を省略した」といえるのは、これと重複関係にある巻十三―八八一のオモロが、

一きこへ、せのきみか、

うらくと、はりやせ

又とよむ、せのきみか

うら／＼と、はりやせ

と、第二節めの反復歌詞「うら／＼と、はりやせ」をもきちんと記載してあることによって明白だからである。『おもろさうし』全体を通観すると、卷十三―八八一のようにきちんと記載した例はきわめて少なく、一五五四首中わずかに四十七首にすぎない。全体の約三パーセント強にあたり、残り九十七パーセント近くが何らかの形で記載が省略されている。このような事実からして『おもろさうし』の記載は、省略を特徴とするといえる。省略の仕方にも二種あり、一は反復歌詞の一部だけを記載する型、他は卷九―五〇九のようにすべてを省略する型である。前者を部分記載、後者を省略記載とし、さらに卷十三―八八一のようにきちんと記載した型を完全記載と名づけると、『おもろさうし』の記載法は(1)完全記載、(2)部分記載、(3)省略記載の三種類からなる。外間氏の分類による歌形にそって記載の実態をみていきたい。

〈オモロ形式〉

(1) 完全記載

一きこゑあおりやへや、

けさよりや、まさり

しよりもり、もちろちへ、

けおの、うち、

もちよる、なちへ、とよま

又とよむ、くにもりきや、

むかよりや、まさり

またまもり、もちろちへ、

けおの、うちに、

もちよる、なちへ、とよみ

(卷四―一七二)

一こてるわの、おやのろ、

あまみや、のろ、やれは、

世そうせち、

せちまさて、あすは

又なりしの、おやおきて、

しねりやのろやれは、

世そうせち

せちまさて、あすは

(卷十四―一〇〇八)

反復歌詞「けおの、うち(に)、もちよる、なちへ、とよま(み)」及び「世そうせち、せちまさて、あすは」が、第一節、第二節ともにきちんと記載されている。

オモロ形式に属する例は約六八〇首あるが、完全記載されている例は八首だけである。

(2) 部分記載

一 なかち、あやみやに、

あやきやね、

おし、あい、しよわれ

又 なかち、くせみやに、

あやきやね (巻二十一—四二五)

一 くめの、さすかさは、

なさか、おもいきみ、

世そろう、ぐしかわ、

げらゑて

又 とよむ、さすかさは、

なさか、おもいきみ (巻二十一—四二五)

巻二十一—四二五の反復歌詞は「あやきやね、おし、あい、しよわれ」だが、第二節には頭の一部「あやきやね」だけを記載し以下を省略してある。巻二十一—四二五の反復歌詞は「なさか、おもいきみ、世そろう、ぐしかわ、げらゑて」だが、第二節には同様に頭の一部「なさか、おもいきみ」だけを記

載し以下を省略してある。このように第二節においては反復歌詞の一部だけを記載するのが部分記載である。この例に属するのは七五首ある。

(3)省略記載

一 なかち、あやみやに、

あや、きやね、

おしあい、しゆわれ

又中ちくせみやに（巻十一―五六三）

一 くめの、さすかさは、

なさが、おもひきみ、

よ、そろり、ぐしかわ、けらへて

又とよむさすかさか（巻九―五〇〇）

部分記載では第二節に反復歌詞が一部記載されていたが、すべて省略されたのが省略記載である。オモロ形式の大多数約六〇〇首がこの例に属する。

〈クエーナ形式〉

一 くらはの、きみの、

せなはの、きみの

又しもとよみ、いくさしもの、

きよやれ、いくさ

又あたり、せめつけて、

かくち、せめつけて

又いちやぢや、せめつけて

かなちや、せめつけて

又あたり、おそいつけて、

かくち、おそいつけて

(巻九一五〇七)

一しより、くに、なる、あんし

又くすく、くになる、あんし

又しより、ちよわる、あちおそい

又くすく、ちよわる、あちおそい

又けおの、よかるひに

又けおの、きやかる、ひに

又大ぎみは、たかべて

又くにもりは、たかべて
又かみしもは、あとへて
又ぢはなれ、そろいて
又いしへつは、このて
又かな、へつは、このて
又いしらごは、おりあげて
又ましらごは、つみあげて
又なみの、うへは、げらへて
又はなくすく、げらへて
又物まいり、しよわちへ
又てら、まいり、しよわちへ
又かみも、ほこり、よわちへ
又ごんげんも、ほこり、よわちへ

(卷十一五二七)

クエーナ形式は全二十七首あるが、そのうち完全記載二十六首、部分記載一首、省略記載はまったくない。これは、対語・対句を重ねて進行するクエーナ形式の構造的性格からして当然のこと、同一歌詞の反復がないから省略のしようがないのである。多少の例外はあるが、記載の省略は大ざっぱに言って反復

歌詞の部分に集中している。

ただ一首の部分記載、

一 おゑす、とよみ、くに

まみきや、いちゑ、みとしよる

又 おゑす、大かわや、御さけは

(卷十四—一〇三五)

第二節の「御さけは」のあとに「いちゑ、みとしよる」が省略されているが、それは反復歌詞ではない。「まみきや、いちゑ、みとしよる」と「御さけは……」が対を構成していて、たまたま下半分が同一歌詞だったことによる省略である。

〈複合形式〉

(1) 完全記載

一 きこゑ、大きみぎや、

おほつゑか、とりよわす、

首里もり、おれわちへ、

あちおそいしよ、きみそわて

おほつ、世わ、みおやせ

又とよむ、せたかこが、

かくらゑか、とりよわす。

またまもりおれわちへ、

おちおそいしよ、きみそわて、

おほつ、世わ、みおやせ

又かいなで、大ごろた、

その、いしやうぎ、

げに、あて、あたおそいに、

よりおれて

あちおそいしよ、きみそわて、

おぼつ、世わ、みおやせ

又げらゑ、まごろた、

いせほこり、たに、あてから、

おそいに、つきおれて、

あちおそいしよ、きみそわて、

おぼつ世わ、みおやせ

又とし、みとせ、いきます、

とこゑ、まちかぎ、

いけな、きみ、おろちゑ

あちおそいしよ、きみ、そわて、

おぼつ世わ、みおやせ

又ゑか、世とせ、させわす、

御事、まはやさ、

なりきよ、かみ、おろちゑ、

あちおそいしよ、きみ、そわて、

おぼつ、世わ、みおやせ

又あか、くちやが、ゆいつき、

あちおそいぎや、ゑりぢよ、

たりろ、てく、させわちゑ、

あちおそいしよ、きみ、そわて

おぼつ、世わみ、おやせ

(卷三―八八)

一しのくりやは、

よなれかみ、やれは、

やれ、この魚

又しのくりやか、

やまと、たひ、のほて、

やれこのへ

又かみにしやか、

やしろ、たひ、のほて、

やれこの魚

又やまと、たひ

なお、かいぎや、のほてか、

やれ、この魚

又やしろ、たひ、

なお、かいか、のほてか、

やれ、この魚

又あおしや、てうたま、

かいか、のほて、

やれこの魚

又ふくしや、てうつしや、

『かいきや、のほて、やれ、このへ』

(卷二十一—一四九七)

注 『』内は卷二十一—一四四七によって補う。

反復歌詞「あちおそいしよ、きみそわて、おほつ、世わ、みおやせ」及び「やれ、このゑ」が各節にわたってきちんと記載されている。複合形式における完全記載の典型的な例である。複合形式に属するオモロは約八六〇首あるが、そのうち完全記載の例はわずかに十四首にすぎない。

(2)部分記載

一しのくりやは、世なれかみ、やれは、

やれ、このゑ

又しのくりやか、やまと、たひ、のほて、

やれ、この「ゑ」

又かみにしやか、やしろ、たひ、のほて、

やれ、このゑ

又やまと、たひなおかい、のほて

又やしろ、たひ、なおかい、のほて

又あおしや、てうたまかい

又ふくしや、てうつしやかい

反復歌詞「やれ、このゑ」が第三節まで記載され、以下の節では省略されている。これと重複関係にある卷二十一—一四九七は、反復歌詞を各節にわたって記載してあるが、このばあいは第四節以下で省略されているので複合形式の部分記載になる。オモロ形式における部分記載は、反復歌詞の一部だけを記載することが条件であったが、複合形式のばあいはもっと複雑になり、この例のように反復歌詞そのものは原形を保っていても、ある節で省略があれば部分記載の範疇にはいる。したがって、複合形式における部分記載は、多様な相を示している。

一きこゑ、きみかなし、

いつこ、しま、よりおれて、

なさいきよもい、あんしおそい、

あまこ、よりかわちゑ、

まなしやど、たちよる

又とよむ、きみかなし、

このみ、しま、つきおれて、

なさいきよもい、あちおそい

又おぎも、うちに、よしらす、

大きみに、しなよわ、

なさいきよもい、あちおそい

又あよが、うちに、おほゑす、

せたかこに、しなよわ、

なさいきよもい、あちおそい

又大ころた、みまぶてす、

おほつより、かゑれ、

なさいきよもい、あちおそい

又もりやゑこた、あがなてす、

かくらより、かゑれ、

なさいきよもい、あちおそい

又てるかはが、てるしのが

てりよる、やに、

おきむ、うまれ、わちゑ

なさいきよもい、あちおそい

あまこ、よりかわちへ、

まなしやど、たちよる

(卷三一九二)

一きこゑきみかなし、

いつこ、しま、より、おれて、

なさいきよもい、あちおそい、

あまこ、より、かわちへ、

まなしやと、たちよる

又とよむきみかなし、

このみしま、つきおれて

又おきもうちに、よしらす、

大きみに、しなよわ

又あよかうちに、おほへす、

せたかこに、しなよわ

又大ころた、みまふてす、

おほつより、かゑれ

又もりやへこた、あかなてす、

かくらより、かへれ

又てるかはか、てるしのか、

てりよるやに、おきも、うまれわちへ、

なさいきよもい、あんしおそい、

あまこより、かわちへ、

まなしやと、たちよる

(巻七―三六五)

この二首は重複オモロで、巻三―九二では反復歌詞「なさいきよもい、あんしおそい あまこ、よりかわちへ、まなしやと、たちよる」が第一節と最終節にきちんと記載され、中間各節はその頭の一部「なさいきよもい、あちおそい」だけを記載し、以下は省略されている。また、巻七―三六五では、省略が進行

して、中間各節に一部記載されていた反復歌詞がまったく姿を消し、最終節に残ったそれによってわずかに部分記載につながっている。部分記載に属する例は一〇三首ある。

(3)省略記載

一ぢ天とよむ、大ぬし、

にるや、せぢ、しらたる、

せぢややり、やまと、しま、ひちめ

「又」だしま、とよむ、わかぬし、

かなや、せぢ、しらたる

又しよりもり、ちよわる

ゑそにやすへ、あちおそい

又またまもり、ちよわる

てたかすへ、あちおそい

又せこぎ、たてらかず、

うちやりやり、とよめ

又せひやこ、たてらかず、

しまより、まさよわれ

又げらへ、大ころた

又きりさへも、(つ)けるな、

かうさびも、つけるな

又はら、おしたて、

はやめよ、くちに、とめれ

又まさけなよ、ぬきやげて、

あうやかたも、さけ

又ける、よす、とみ

おしうけかず、み、まぶら

又せやる、おき、めつら、

くりうけかず、み、まぶら

又やまと、まへほしやの、

あよなめの、いつこ

又やる、まへほしやの、

ことなめの、おかつきや

又せくさ、てく、たては

ひせとあわちへついのけ

又急そこ、てく、たては、

にるやそこ、ついのけ

又きもか、うちに、おもわは

きもたりよ、しめれ

又あよが、うちに、おもわば

たいちに、おとちへ、す、てれ

又天か下、くにかす、

大ぬしす、よしらめ(巻三―九七)

一きこゑ、きみかなし、

いつこ、しま、よりおれて、

なさいきよもい、あんしおそい、

あまこ、よりあわちへ、

まなしやど、たちよる

又とよむきみかなし、

このみ、しま、つきおれて

又おぎも、うちに、よしらす

大きみに、しなよは

又あよが、うちに、おほへす、

せたかこに、しなよわ

又大ころた、みまふてす、

おぼつより、かかれ

又もりあいこた、みまふてす、

かくらより、かゑれ

又てるかはが、てるしのが、

てりよる、やに

おぎも、うまれわちへ

(巻九一四九七)

卷三一九七は、反復歌詞「せちややり、やまと、しま、ひちめ」が第二節以下で完全に省略されている。卷九一四九七は、部分記載の例にあげた二首と重複関係にあり、前二首よりも記載の省略が進み、反復歌詞が第二節以下ではまったく省略されている。複合形式の大多数がこの省略記載に属する。

これまで、『おもろさうし』の記載法を(1)完全記載、(2)部分記載、(3)省略記載に三分類し、外間氏の歌形分類にそってその実態をみてきたが、ここで記載法とオモロの歌唱法との関係について考えたい。歌唱法という表現は適当な言い方でないかも知れないが、音楽的な面ではなく、言語表現の形態の意味で使っ

ている。すでにみてきたように、『おもろさうし』の記載はさまざまな様相を示しているが、重複関係にあたる同一オモロが省略記載されたり、部分記載されたり、完全記載されたりする事実が示すように、それは『おもろさうし』という文献レベルの差異であり、オモロ本来の歌詞の形態の差異を示すものではない。意識的に重複オモロを引例したのは、そのことが一目でわかるようにするためであった。オモロの歌唱法は、部分記載、省略記載を煩をいとわず完全記載の形に復原することによって明らかになる。さきに外間氏は、「複合形式とその変形になると、折り返す方法の不明な点が多い」ことを指摘していたが、おそらくその「不明」は『おもろさうし』の記載法の特徴にわずらわされた面が大きかったのではなからうか。複合形式の記載を完全記載に復原する手続きをとることによって、その歌唱法は明らかになるはずである。そうすると、複合形式の歌唱法は、同一歌詞を各節で反復歌唱する点でオモロ形式と一致する。両者の差異は長短の分量的差異にすぎず、構造的差異はない。

オモロの構造

前節では、『おもろさうし』の記載法の実態を調べ、オモロの歌唱法を明らかにしたが、ここではそれをふまえてオモロの構造について考えてみたい。歌形論については、従来も研究がないわけではないが、意味論に関わる観点から自分なりの分類を試みたい。

南島古謡は、対語(句)法という点に構造的特徴があるが、オモロは、対語(句)のほかに反復部を

有するかどうかが構造分類の大きな指標になる。その基準によってオモロの構造を分類すると、対語・対句を重ねて叙事が進行する対句進行型、対句部と反復部との二重の構造要素からなる反復型、反復型と類似するが反復部が一様でない特殊反復型、以上のいずれにも属さない特殊型に大きく分類することができ。以下、下位分類を試みながらそれぞれの構造的特徴について述べてみたい。

(一) 対句進行型

外間氏の歌形分類のクエーナ形式にほぼ対応する。対語・対句を重ねてことからの展開を叙述する構造をもつ。この構造は、オモロに先行するといわれるミセセル、オタカベ、ウムイ、クエーナ等々が有する構造で、成立も反復型より古いと考えられている。

毎年二月中、田植祝オリメノ時、アムガナシ御殿、並、伊是名城ニテノ、ミセセル（昔ノ神託歟）

アラレヲボツ アラレカグラ

ニルヤセヂノ カナヤセヂノ

マキヨニアガテ クダニアガテ

イチャジャウウチニ カナジャウウチニ

夜ガ七日^{ナシカ} 日ガ七日^ヒ

トデコマテ ゲニアルトキヤ

イジキモノ ヤイキモノ

エガウムタネ ウバシタネ

キモト、メ	アユト、メ
イジキシヤヒ	ヤイキシヤヒ
テルカハガ	イチヨコガ
アカラタイハ	モジロタイハ
サシキヤムテ	ヤネキヤムテ
ヲレツレテ	イザツレテ
イチヤ門カラ	カナ門カラ
アフヘイヂテ	テリイヂヘテ
ニルヤトヨム	カナヤトヨム
ニヂリキヨ	キミキヨラガ
イチヤトゞロ	カナトゞロ
アフヘイヂヘ	テリイヂヘ
ゲニアスヤ	ダニアスヤ
テダノコワノマツガネ	月ノコワノマストメガ
コシノ田原	ケヨノミチヨヘ
アマタネハ	シラタネハ
千ノタバリ	万ノタバリ

マキオルシヤヘ	サシオルシヤヘ
ヲシヨハカテ	ミヨハカテ
ヌキヲヘヤヘ	サシヲヘヤヘ
ゲニアコト	ダニアコト
ヨシヤハイ	アマミヤガミ
伊是名ノロ	アマミヤノロ
先立テ	ハナタテ、
ニギリキヨ	キミキヨラガ
ヤジユコヒキ	真人ヒキ
伊是名森	真玉森
サヨコシヨル	カヘズシユル
イベガヌシ	ツカサヌシ
シラレラバ	ノダテラバ
大ゴロガ	モリヤヘチヨガ
野ハルタテ、	野峯タテテ
哇ギリニ	マスギリニ
アマタネハ	シラタネハ

ヌキヲヘヤヘ	サシ植ヘヤヘ
ゲニアモノ	ダニアモノ
御守ヤヘ	ヤシナヤヘ
モタイラシヤヘ	アマヘラシヤヘ
マウラ	マカラ
石ギヤ実ニ	カナギヤ実ニ
イキナビキ	ヨリナビキ
ゲニアル時	ダニアル時
大ゴロ	モリヤヘチヨ
野ハルイデ、	野ミネイデテ
コムデウケテ	御袖ウケテ
肝ボコリ	アユボコリ
穂サキトテ	アマミキヨニ
イシマツリシヤヘ	穂ナカトテ
ノロカミノ	ヌシカミノ
アフタモト	ザヨクスラバ
アマコタレ	シラコタレ

ガメンコ	マラケ
居セナメテ	ナメ居テ
ノ口神へ	ヌシカミへ
イセマツリ	
ヲニカラヤ	穂本トテ
首里森	真玉森
百浦添	スへノ御殿
カケブサヒ	シキブサヒ
ゲニチヨワル	ダニチヨワル
テダホコロ	アンジヲソヒ
天ガスエ	王ニセ
イセダイリ	ミヤダイリ
マキヨラクニ	マダカクニ
ゲニトヨル	ダニトヨル

〔琉球国由来記〕

反復歌詞をもたず、厳密な対語・対句を重ねて長篇の叙事を展開する。ここにはミセセルの一例をあげたが、他のオタカベ、ウムイ、クエーナも同様である。これが南島古謡の一般的構造で、この伝統を継承

したのが対句進行型のオモロである。対句進行型は、対句の構成のしかたにより四つに下位分類することができる。

(1) A 型

第一節と第二節、第三節と第四節、第五節と第六節……のように対語(句)を構成する型。

一しより、くになる、なる、あんし(A)

又くすく、くになる、あんし(A)

又しより、ちよわる、あちおそい(B)

又くすく、ちよわる、あちおそい(B)

又けおの、よかるひに(C)

又けおの、きやかる、ひに(C)

又大ぎみは、たかべて(D)

又くにもりは、たかべて(D)

又かみしもは、あとへて(E)

又ぢはなれ、そろいて(E)

又いしへつは、このて(F)

又かな、へつは、このて(F)

又いしらは、おりあげて(G)

又ましらごは、つみあげて (G)

又なみの、うへは、げらへて (H)

又はなくすく、げらへて (H')

又物まいり、しよわちへ (I)

又てら、まいり、しよわちへ (I')

又かみも、ほこり、よわちへ (J)

又ごんげんも、ほこり、よわちへ (J')

(卷十三—五二七)

第一節の「しより、くに、なる、あんし」と第二節の「くすく、くになる、あんし」、第三節の「しより、ちよわる、あちおそい」と第四節の「くすく、ちよわる、あちおそい」、第五節の「けおの、よかるひに」と第六節の「けおの、きやかるひに」、……がそれぞれ対を構成している。対語(句)をA, A', B, B', C, C', ……とあらわすことができる。この型に属する例は十八首ある。

(2) B 型

同一節内で対語(句)を構成する型。

一くらはの、きみの、(A)

せなはの、きみの (A')

又しもとよみ、いくさ(B)

しもの、きゝやれ、いくさ(B')

又あたり、せめつけて、(C)

かくち、せめつけて(C')

又いちやぢや、せめつけて(D)

かなちや、せめつけて(D')

又あたり、おそいつけて(E)

かくち、おそいつけて(E')

(巻九一五〇七)

第一節の「くらはの、きみの」と「せなはの、きみの」、第二節の「しもとよみ、いくさ」と「しもの、きゝやれ、いくさ」、第三節の「あたり、せめつけて」と「かくち、せめつけて」、……のように同一節内で対を構成している。記号化するとAA', BB', CC', ……とあらわすことができる。この型に属する例は八首ある。

(3) C 型

一 おとまこい、(A)

あか「ま」こい、(A')

おかるな(α)

又おかやへより、(B)

おわよりな(B)

ゑけり、あんし(B)

又といし、いちへれ(C)

あしやけいちへれ(C)

おなりあち(r)

又のおたにかいきや、(D)

おわにきや、(D)

ゑけり、あんし

又世こと、世に(E)

せきうせ、世に(E)

おなり、あんし

又世ことまは、(F)

世さうせまは、(F)

ゑけり、あんし

又しまゑれい、(G)

国ゑれい、(G)

おなり、あんし

又しまもまは、(H)

くにもまは、(H')

ゑけりあんし

又うみちへ、ゑれ (I)

おかちへ、ゑれ (I')

おなりあんし

又うみちへまは、(J)

おかちへまは (J')

ゑけりあんし

又たまゑれい、(K)

つしやゑれ、(K')

おなりあんし

又しなわになや (L)

ひきやにな (L')

ゑけりあんし

(卷十四—九九八)

第一節の「おとまこい」と「あかまこい」、第二節の「おかやへより」と「おわよりな」、第三節の「といし、いちへれ」と「あしやけいちへれ」、……が対を構成している点は、B型と同じだが、「おかるな」(α)、「ゑけり、あんし」(β)、「おなりあち」(γ)……といった部分が付属しているところが異なる。記号化するとAA'α, BB'β, CC'γ, ……とあらわすことができる。この型に属する例は一首ある。

(4) D 型

以上の三型が複合した構造をもつ型。

一はなくすくあんしつきの、大や 型

又花城ちやらつきの、大や A 型

又ひとりくわの、

やくさくわは、

なちへ、おちへ

又ほか、あたりに、

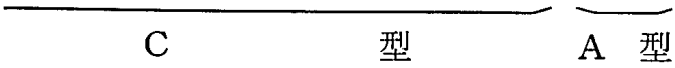
うち、あたりに

あへる

又はつかりやか

したしらひよは、

ゑらて



又たちゑらひに、
すちゑらひに、

ゑらて

又はた、よみやは、

みしよ、よみやは、

しちへ、おちへ

又はなくすく、

いちやかわに、

おれて

又かせはゑちへ、

ぬのはゑちへ、

おれて

又おもひかけす、

しより、あくかへ、

いきやて

又ま人も、

こか、みほしや、ありよれ

又おきてたも、

こか、きよらさ、あよれ、

型

A

(卷十四一九八三)

最初の二節と最終の二節がA型で、中間各節はC型からなる複合型である。

一あかるいに、さくはな、

天とよて、さくはな

又うきおほちか、おわにや、

ゑん、けらへ、あらまし

又くむさうすや、ちよむ、

みちへ、いちへ、いき、ぬは、まし

又くたるつち、や、ちよむ、

みちへ、いちへ、あよ、ぬは、まし

(卷十一一五五七)

第一、二節がB型、第三、四節がA型で、A+Bの複合型である。対句進行型の複合型はA+C型とA+B型の二種類がある。D型に属する例は二首ある。

(二)反復型

対句進行型が対語・対句を重ねて進行する対句部のみからなるのに対し、対句部のほかに同一歌詞を繰

り返す反復部をもつのが反復型である。この反復部をもつ点が他の南島古謡とオモロを区別するといわれる。すなわち、大多数のオモロが反復型に属し、反復部はオモロにおいて発展した。反復型は、対句部と反復部の構成のしかたから四種類に分類することができる。

(1) A 型

第一節と第二節、第三節と第四節、第五節と第六節、……がそれぞれ対を構成する点は、対句進行型のA型と同じであるが、その他に、各節の末尾に反復歌詞が続いている。

一きこゑ、大きみぎや、

おほつゑか、とりよわす、

首里もり、おれわちへ、(A)

あちおそいしよ、きみそわて、

おほつ、世わ、みおやせ (R)

又とよむ、せたかこが、

かくらゑか、とりよわす。

またまもりおれわちへ、(A)

あちおそいしよ、きみそわて、

おほつ、世わ、みおやせ (R)

又かいなで、大ごろた、

その、いしやうぎ、

げに、あて、あたおそいに、

よりおれて、(B)

あちおそいしよ、きみそわて、

おぼつ、世わ、みおやせ (R)

又げらゑ、まごろた、

いせほこり、たに、あてから、

おそいに、つきおれて、(B)

あちおそいしよ、きみそわて、

おぼつ世わ、みおやせ (R)

又とし、みとせ、いきます、

とこゑ、まぢかき、

いけな、きみ、おろちゑ、(C)

あちおそいしよ、きみ、そわて、

おぼつ世わ、みおやせ (R)

又ゑか、世とせ、させわす、

御事、まはやさ、

なりきよ、かみ、おろちゑ(C)

あちおそいしよ、きみ、そわて、

おぼつ、世わ、みおやせ(R)

又あか、くちやが、ゆいつき、

あちおそいぎや、ゑりぢよ、

たりろ、てく、させわちゑ、(D)

あちおそいしよ、きみ、そわて、

おぼつ、世わみ、おやせ(R)

(卷三―八八)

対句部の構造をみると、AとA、BとB、CとCがそれぞれ細部にわたって対を構成している(最終節だけは対をもたない。これは奇数節で終了するオモロのばあいにはしばみられる形である)。このように、第一節と第二節、第三節と第四節、第五節と第六節、……が対を構成し、各節の末尾に「あちおそいしよ、きみそわて、おほつ、世わ、みおやせ」が反復される構造をもつのが反復型のA型である。反復部をRとして記号化すると、A・R、A'・R、B・R、B'・R、C・R、C'・R、……とあらわすことができる。オモロの大多数がこの型に属する。

(2) B 型

一きこゑ大ききや、(A)

とよむせたかこか、(A)

みしま、いのられ(R)

又首里もり、ちよわる、(B)

ま玉もり、ちよわる、(B')

又なさいきよもい、あんしおそい、(C)

あが、かいなてあんしおそい(C')

又大きみよ、いきよて、(D)

せたかこよ、てつて(D')

又急そこ、なよ、こゆわちへ(E)

みおうね、なよ、こよわちへ(E')

又あまの、そこらしや、(F)

あまの、まうれしや(F')

又よひき、とみ、おしうけて(G)

せぢあら、とみ、くりうけて(G')

又世づき、とみ、おしうけて(H)

くもこ、とみ、くりうけて(H')

又まやい、とみ、おしうけて(I)

おしあげ、とみ、くりうけて (I)

又たけ、たけよ、いので (J)

もりもりよ、いので (J)

又あおりや、とりよわり (K)

ておりや、とりよわり (K)

又ゑそこかず、つけわちへ、(L)

みおうねかず、つけわちへ (L)

又そさん、なご、やけて (M)

あおなみやよ、とぶやちへ (M)

又おしうけかず、み、まぶら (N)

くりうけかず、み、まぶら (N)

又きみくしよ、世しらめ (O)

ぬしくしよ、世しらめ、(O)

(卷一—三八)

第一節の「きこゑ大ききみや」と「とよむせたかこか」、第二節の「首里もり、ちよわる」と「ま玉もり、ちよわる」、第三節の「なさいきよもい、あんしおそい」と「あが、かいなてあんしおそい」、……の
ように同一節内で対を構成する点は、対句進行型のB型と同じ。そのほかに、各節の末尾に反復歌詞「み

しま、いのられ」が繰り返されていることによって反復型のB型になる。記号化するとAA'・R, BB'・R, CC'・R, ……とあらわすことができる。この型に属する例は二二四首ある。

(3) C 型

一しよりもり、(A)

またまもり、(A')

けらへて、(α)

のちまさる、世かけ、ひやし、みおやせ (R)

又しも、あしから、(B)

もとあしから、(B')

おり、あけて、(β)

又たけ、たかく、(C)

はりひろく、(C')

おり、あけて、(γ)

(卷五—二二六)

第一節の対語(句)「しよりもり、またまもり」につづけて「けらへて」が付属し、第二節の対語(句)「しもあしから、もとあしから」につづけて「おりあけて」が付属し、第三節の対語(句)「たけたかく、はりひろく」につづけて「おりあけて」が付属している。ここまでは対句進行型のC型と同じである。そ

のほかに、各節の末尾に反復歌詞「のちまざる、世かけ、ひやし、みおやせ」が繰り返されるので、反復型のC型となる。記号化するとAA'a・R, BB'β・R, CC'γ・R, ……とあらわすことができる。この型に属する例は十四首ある。

(4) D 型

以上の三型の複合した型。反復型の複合型には、A+B型とA+C型の二種類がある。

一きこゑ大ききや、

てるかはに、しなて

きらのかす、

あちおそいす、てつれ(R)

又とよむせたかこか、

てるしのに、しなて

又としみとせ、なるきやめ、

とこゑ、まとうさ

又ゑか四とせ、なるきやめ、

ゑりちよ、まとうさ

又おほつゑか、とりよわちへ、

いけなきみ、よりおろちへ

型

A

又かくらゑか、とりよわちへ

なりきよきみ、つきおろちへ

又しよりのろ、さきたて、

なよかきよ、さきたて

又まかひ、のろ、さきたて、

みちへりきよ、さきたて

又きほのろよ、さきたて、

とよましよ、さきたて

又やりおそいよ、さきたて、

おやのろよ、さきたて

又あちおそいよ、さきたて、

たよみきよ、よほたて

型

B

(卷十二一七一二)

前半はA型、後半はB型からなるA+Bの複合型である。この型に属する例は九十首ある。

一あらかきの、うきおほちか、

もりに、

あか、なさす、

ふため、まさりよわれ (R)

又大さとのとよみもり

おれわちへ、

あか、なさす (R)

又大さとの、ねたてもり、

おれわちへ、

あか、なさす (R)

又あらかきの、いなみね、

おれわちへ、

あか、なさす、(R)

又十いろ、あしやけ、

八いろ、あしやけ、

このて、(a)

あか、なさす、ふため (R)

又百かめは、

八十かめは、

すへて、(β)

C

型

A

型

あか、なさす (R)

又おもいきみ、

けらへきみ、

てつて、(?)

あか、なさす (R)

(卷十一—五六〇)

前半がA型、後半がC型からなるA+Cの複合型、この型に属する例は十四首ある。

(三) 特殊反復型

対句部のほかに反復部をもつ点は反復型と同じだが、反復型が同一歌詞を各節にわたって繰り返す単純な反復なのに対し、節により反復歌詞の言い替えのあるのが特殊反復型である。

一きこへ、せんきみきや、

なりきよ、おれふさて

なさいきよもい、わうにせ、

せち、まさて、ちよわれ

又とよむ、きみ、とよみきや、

いけな、おれ、なふちへ

又みもん、内の、まみやに、

あすて、なふちへ、からわ

又かわるめの、まみやに、

ほこて、なふちへ、からわ

又さしふ、五ころに、

おれなふちへ、からわ

又むつき、七ころに、

みまふてす、おれたれ

又しよりもり、ちよわる、

あか、なさいきよ、わうにせ、

すゑなく、せち、まさて、ちよわれ

又またま、もり、ちよわる、

あか、なさいきよ、わうにせ

(卷四—二二〇)

前半は「反復歌詞」「なさいきよもい、わうにせ、せち、まさて、ちよわれ」が繰り返される。このま

けば反復型になるが、最終二節を「あか、なさいきよ、わうにせ、すゑなく、せち、まさて、ちよわれ」と言い替えてあるので特殊反復型としてくくる。

一 あんしおそいや、

金うちに、ちよわれ、

世の、さうぜ、しよわれ

大きみす、けいやりよわれ

又 あんしおそいや、

けおの、うちに、ちよわちへ、

世の、さうぜ、しよわれ、

せたかこす、けいやり、よわめ

又 あんしおそいや、

おぎも、うちは、なげくな、

大きみす、けいやり、よわれ

又 たゝみきよは、

R₁

R₂

R₁

あよか、うちは、なけくな
又首里もり、大ごろか、

しま、ひろく、そへて、
あんしおそいに、
世そへて、みおやせ

R₃

又みしまかす、ころく
国、ひろく、そへて

R₄

又きみはゑが、
みやこ、しま、はちへおわれ、
しまひろく、そへて

R₃

又けおのしよか、
やへましま、はちへ、おわちへ、
くにひろく、そへて

R₄

又やへま、しま、いづこ、

あせら、ためやはは、

大きみす、世しらめ

R₅

又はたら、しま、くはら、

ちかわ、ためやはは、

せたかこす、世しらめ

R₆

又あせら、ためやはは、

おきなます、すもらん、

大きみす、世しらめ

R₅

(巻一—三六)

反復歌詞は「大きみす、けいやりよわれ」(R₁)、「せたかこす、けいやり、よわめ」(R₂)、「しま、ひろく、そへて、あんしおそいに、世そへて、みおやせ」(R₃)、「国、ひろく、そへて、あんしおそいに、世そへて、みおやせ」(R₄)、「大きみす、世しらめ」(R₅)、「せたかこす、世しらめ」(R₆)の六種類があり、第一節から第四節まではR₁とR₂を交互に反復し、第五節から第八節まではR₃とR₄を交互に反復し、第九節

から第十一節まではR₅とR₆を交互に反復している。六種類の反復歌詞を交互に復するいっそう複雑な構造をもっている。このようにさまざまな反復構造をもつ特殊反復型は、反復型の成立以後に出現する構造であらう。

一せちあら、かみ、とまり、

くもこ、よせ、とまり、

なみかせ、なこやけて、

さやはたけ、きみくしよ、まふれ

又あさとれか、しよれは、

せいやりとみ、おしうけて、

なみかせ、なこやけて、

あすもりの、きみくしよ、まふれ

又ようとれか、しよれは、

ふさいとみ、おしうけて、

なみかせ、なこやけて、

せらちよんの、きみく、しよ、まふれ

又うみ、なおし、たてわちへ、

なみおそいは、おしかけ、

なみかせ、なこやけて、

うらのかす、きみくしよ、まふれ

又かざなおり、あおらちへ、

あけの、みそ、あおらちへ、

なみかせ、なごやけて、

うらのかす、きみくしよ、まふれ

又こばお、もりの、きみく、

まやゑて、おこらめ、

なみかせ、なごやけて、

しよりもり、きみくしよ、まふらめ

又かな、もりの、きみく、
まやゑてす、おこらめ、

なみかせ、なこやけて、
またまもり、きみくしよ、まふらめ

(卷十三—八五三)

第四節と第五節を除いて、各節の反復歌詞少しづつだがすべて異なっている。ここまでくると、反復の概念でくくれないようにも思えるが、反復部が同格構造をなしていることよってかろうじて反復の限界を保っている。

特殊反復型に属する例は十七首ある。

(四)特殊型

以上の対句進行型、反復型、特殊反復型からはみ出る特殊な構造をもつオモロが数首ある。

(1)三節とも同一歌詞からなる。

一やにやはれ、ゑ、おい、ち

よるめへ、ゑい、やうら、

やうら、やうらへ、

ゑおい、やうら、やうら、

やうら、あゑ、おい、やうら、

やうら、やうら、ゑおい、

やうらや、うらや、うら、

あゑい、ゑおい、

又やにやはれ、ゑおい、ち

よろめへ、ゑい、やうら、

やうら、やうら、ゑおい、

やうら、やうら、ゑおい、

やうら、やうら、やうら、

あゑい、ゑおい

又やにや、はれ、ゑおい、ちよ

ろめい、ゑい、やうらや、やうら、

やうら、ゑおい、やうら、

やうら、やうら、ゑおい、

やうら、やうら、やうら、

あゑい、ゑおい、

(卷十二—七二八)

対句部らしきものもなく、すべて離子的な詞からなり、三節ともまったく同格構造をなしている。

(2) 対句も反復もない構造

一ぢやなもひや、

たか、なちやる、くわか、

こか、きよらさ、

こか、みほしや、あよるな

又もゝちやらの、

あらて、おちやる、こちやくち、

ちやなもしゆ、あけたれ

又ちやなもいか、

ちやな、うへばる、のほて、

けやけたる、つよは、

つよからと、かはしや、ある

(卷十四—九八二)

対句も反復もなく一直線に叙述が進行する。南島古謡の中において系統を求めることのできない特殊な構造である。

(3) その他

一きこゑきみかなし

おれて、とよま

又かくらの、けわい、

しない、やちよこ

又とよむきみかなし

おれて、とよま

又おほつの、けわい、

しない、やちよこ

又きこゑおにくすく

又あか、かねそへつは、

又とよむおにくすく

又しろかね、たまきや

又うちおけ、うちおけ、うちうけ

又いちへきや、たまきや

又たまこしけ、うちうけ

又すもりやは、けつか

(卷六―三三二)

対語(句)が一行とびにある不思議な構造をなしている。これをつぎのように並べかえてみると、

一きこゑきみかなし

おれて、とよま

又とよむきみかなし

おれて、とよま

又かくらの、けわい、

しない、やちよこ、

又おほつの、けわい、

しない、やちよこ

又きこゑおにくすく

又とよむおにくすく

又あか、かねそへつは

又すもりやは、けつか

又しろかね、たまきや

又いちへきや、たまきや

又うちおけ、うちおけ、うちうけ

又たまこしけ、うちうけ

対句進行型と一致する。このような構造は、伝承や記載上の誤りではないだろう。対句進行型のA型をふまえた技法上のくふうと考えたほうがよいだろう。

一ゑ、け、あかる、三日月や

〔又〕ゑ、け、かみぎや、かなまゆみ

又ゑ、け、あかる、あかほしや

又ゑ、け、かみぎや、かなまゝき

又ゑ、け、あかる、ほれほしや

又ゑ、け、かみか、さしくせ

又ゑ、け、あかる、のちくもは

又ゑ、け、かみか、まなきゝおび

(卷十一五三四)

各節のことばが対を構成する資格をもちながら実際はそうなっていない。第一節と第二節、第三節と第四節、第五節と第六節、第七節と第八節が主述の関係をなしている。その点は他に類例のない構造である。

一くめの、大おそいか、みもん

又ゑけわいと、みもん

又くめのせたかか、みもん

又ゑけわいと、みもん

又くめのあんしおそいか、みもん

又ゑけわいと、みもん

(卷十二―七〇三)

第一、三、五節は対句部としてふさわしい資格を備えているが、第二、四、六節はまったく同一歌詞で反復部形である。このように同一歌詞が対句部を構成するのは他に類例がない。この部分を反復部と考
え「又」記号をはずすと反復型のA型と一致する。